販通 180205

TECHNOS

突撃！リスクマネージャー！

医療の安全に取り組む全国のリスクマネージャー様にインタビュー

2019
3 月号

No.115 医療法人社団藤聖会 富山西総合病院 医療安全管理室 科長 医療安全管理者 土田真人様

【富山西総合病院／富山県富山市】

【土田様】

■病院の紹介（抜粋）

1987 年 5 月　医療法人社団藤聖会が八尾町に
　　八尾総合病院を開設
2017 年 11 月　富山西リハビリテーション病院を開設
2018 年 2 月　八尾総合病院を一部残し、
　　富山西総合病院を開設
【病床数:154 床】

■病院の理念

Good Neighbors（良き隣人でありたい）
Good Hospitality（最適なホスピタリテイを提供したい）

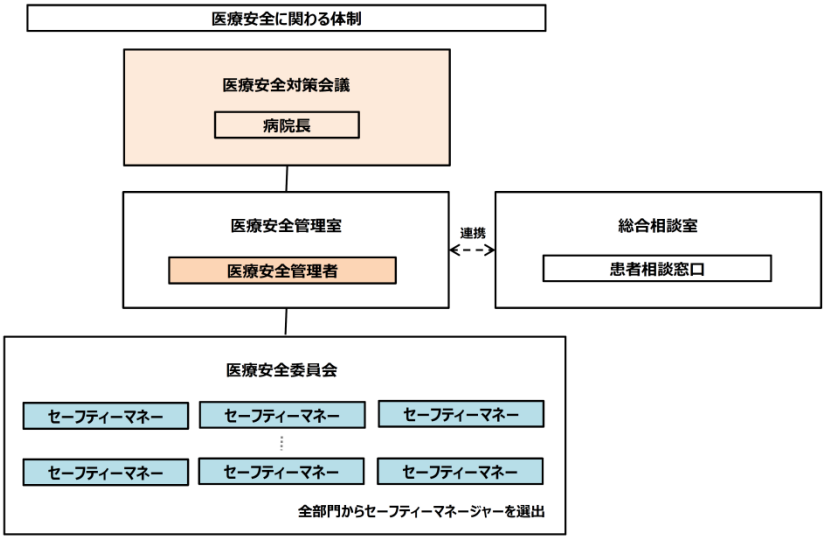
私たちは、患者さまと病院の関係を、いつでも気軽に接することができるものにと考えています。背伸びせず、かしこまらず、「ちょっと隣へいってくるよ」というような気持ちで頼っていただけるような関係を望んでいます。患者さま、ご家族さま、地域のみなさまにとって私たちが「良き隣人」となれるよう、開かれた病院づくりを行ってまいります。

病気やケガを治すことは、医療の基本です。ですが、患者さまやご家族さまの気持ちや置かれた状況をトータルに考え、一人ひとりに合った適切なサービスと環境を提供することもまた、これからの医療に欠かせないものです。そのことを忘れず、いつでもどんなときでも、ホスピタリティを実感していただける努力をしてまいります。

１．組織体制について

医療安全に関する組織体制を教えて下さい。

医療安全管理指針に基づき、全部署から選出したセーフティマネージャーで構成された「医療安全委員会」と、専従の医療安全管理者と兼任の医療安全管理者から構成される「医療安全管理室」が協力し、現場水準で考えた医療安全活動を行っています。「医療安全対策会議」は組織横断的に院内の医療安全管理を担い、患者さんと医療従事者との対等な関係を基盤とする「患者中心の医療」の実現を図るため、部門間で連携してさまざまな取り組みを行っています。



土田様の主な業務内容を、院内各部署との連携を含めて教えて下さい。

私の主な業務は以下の通りです。

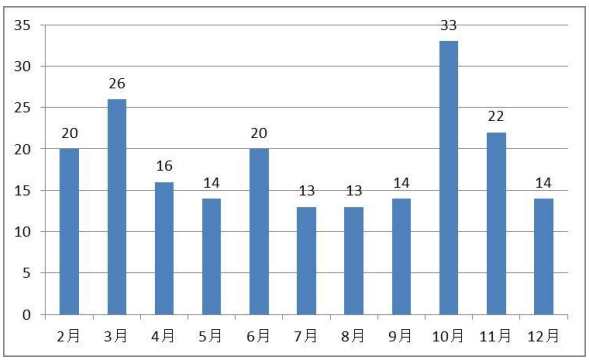
1.医療安全管理室の業務に関する企画立案及び評価を行うこと。
2.医療安全管理に関する問題点の把握・分析・対策の立案・実施・評価等を行うこと。
3.医療安全対策に係る体制を確保するための職員研修を企画・実施すること。
4.医療安全に関する職員の安全管理に関する意識の向上や指導等を行うこと。
5.医療安全対策の体制確保のため各部門との調整を行うこと。
6.各部門におけるセーフティマネージャーの支援を行うこと。
7.総合相談室と密接な連携を図り、医療安全対策に係る患者・家族の相談に適切に応じること。
8.その他医療安全対策室の業務を行うこと。

２．転倒・転落事例情報の収集と対策について

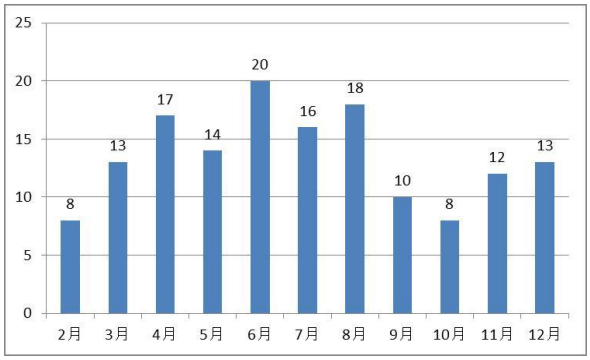
近年の事例発生件数はどのように推移していますか？またその原因はどのようにお考えですか？

当院は 2018 年２月に開設しましたので、正確な数は比較できませんが、前身である八尾総合病院と、富山西総合病院のレベル 1 以上、同時期を比較した月別発生件数を見てみると、事故の発生率はほぼ同じですが、前の病院では活動性の高い患者が多く、ベッドの乗り降り、ポータブルトイレや病室内トイレへの移動を支援する取り組みが中心でした。これは、認知症患者の割合が増えたことや、移乗支援用具が使えなくなったことなど、転倒の質や発生の状況も変化していると思われます。患者さんの状態や環境は、日々変化していくので試行錯誤の毎日です。

レベル 1 以上の月別発生件数



前身の八尾総合病院(199 床)・2017.02-12



富山西総合病院(154 床)・2018.02-12

事故防止のための人的対策を教えて下さい。

転倒アセスメントで危険度を分類し、危険度Ⅲと判定した患者さんの情報は、毎日のカンファレンスを通してスタッフで共有して注意を払うことにしています。

また、病棟のセーフティマネージャーは、週に一回のペースで ①入院時転倒アセスメント未評価数 ②転倒危険度Ⅲ患者数 ③（転倒に関する）看護診断立案数 ④転倒アセスメント再評価未実施数 ⑤離床グッズ（センサー）未登録数 をチェックして未実施の場合はセーフティマネージャーから担当看護師に呼び掛けてもらっています。

医療安全委員会の中には「巡回・点検部」という部会があり、医療安全管理者とは別に院内ラウンドを行っています。例えば、ベッドサイドのスリッパの置き方や使用方法などの細かい部分も転倒・転落の点検項目に加えてチェックするようにしており、病棟スタッフへフィードバックしたうえで、必要に応じて医療安全委員会でも改善内容を報告することにしています。

特に注力されている活動や、貴院の特徴と思われる取り組みがあれば教えて下さい。

転倒・転落発生後の観察や対応に不備がないように、「転倒・転落後の初期（6 時間）対応シート」を作成し、使用しています。この対応シートの内容は、夜間帯であっても患者の状態の条件を満たせば、レントゲン撮影や CT 撮影を行うことを院内のルールとして、医療安全マニュアルに収載しています。医療安全管理者はこの対応シートの利用状況をチェックしていますが、特別な理由がない限り使用率は 100%です。

3. 医療安全に関する研修について

医療安全に関連した研修の年間計画や開催にあたって工夫はありますか？

全職員を対象とした医療安全研修会は、最近では平成 30 年 12 月に ①「医療安全管理指針について」 ②「医療看護支援ピクトグラムについて」の 2 つのテーマで実施しました。この 2 つのテーマを選んだ理由は、インシデントレポート分析の過程で院内共有情報であるピクトグラムについて知らない職員がいることを知ったからです。テーマはその時に応じて柔軟に対応していきます。研修の参加率は追加研修や個別研修を行うので 100%となっています。

また、以前の医療安全研修では、「医療安全に関する当院のルール」をテーマに開院直後に行いました。これは新しい病院になって、今までのルールが変更・修正されたものがあることや、重要なルールを全職員に改めて周知する必要があったからです。

地域の病院と医療安全に関する連携はありますか？
また、医療安全地域医療連携加算制度の取り組みについて教えて下さい。

今年度は医療安全加算 1 の施設と相互のラウンドを実施しました。他院の医療安全チームとの交流は、日常とは異なる視点での指摘から多くの気付きや発見があり、今後の当院の医療安全活動の実施に関して大きな刺激を受けることができました。

また、この相互ラウンドで「医療安全管理指針の職員への周知徹底が不十分」だという指摘があり、早急に全職員に徹底する必要性を感じ、今年度の医療安全研修のテーマのひとつとして開催しました。

4．離床センサーについて

貴院使用機種： コールマット･コードレス ×12 台 ／ 超音波･赤外線コール ×15 台
徘徊ナビ･ハイパー ×3 台（タグ×6 台）

離床センサーの使用基準について教えて下さい。

離床センサーを選択する際のツールとして、「離床グッズ適応フローチャート」や離床センサーの特徴などを記載した「離床グッズ一覧表」を作成し、医療安全マニュアルに収載して活用しています。

当院ではベッド周りの転倒が多いので、ベッドから降りようとする動作の起点をキャッチすることが重要です。それを知るために離床センサーを使用していますが、センサーのコールがあればすぐに対応できるようにスタッフに徹底されるまで、現場のセーフティマネージャーの地道な苦労がありました。

※使用上の効果・工夫や管理方法などは今号の「現場リポート」でご紹介いたします。

5．メーカーへのご要望について

弊社の商品や顧客サービスについてご要望、ご意見がありましたらお聞かせ下さい。

マットセンサーの表裏がひと目で分かると設置がし易いので助かります。一時当院では、テープやマジックで表裏の区別をするため印を入れていましたが、はがれたり消えたりするので上手くいきませんでした。

離床センサーを使用するにあたりテクノスジャパンの製品説明会や研修会を開いてもらい大変参考になっています。その場でスタッフに徹底できないこともあり、いつでも再確認できるように製品説明会や研修会で伝えるような内容や使用のノウハウ等をホームページに掲載して、スタッフが自己学習できるようにしてもらえれば嬉しいです。特に当院導入の「超音波・赤外線コール」は設置にテクニックが必要だと感じています。

6．何か一言お願いいたします。

病院の PR やポリシーなどをお聞かせ下さい。

過去に当院では転倒・転落が増加した時期があり、病院全体で様々な転倒・転落対策を行った結果、発生数・発生率が共に下がりました。何が要因で下がったのか議論したのですが、スタッフ全員で様々な対策に取り組んだことから効果的な対策を特定することはできませんでした。しかし、これらの活動内容を通じて ①患者さんをよくみること ②転倒・転落事故の減少をスタッフが本気で信じること が重要だと感じました。

看護方針と用具の使用方法の徹底から患者さんをみる時間が増えた今では、対策の成果を信じるスタッフの意識も変化して、「私たちが事故を減らすんだ！」というような空気になってきたと感じています。

離床センサーを選定する過程も「患者さんをよくみる」良い機会のひとつです。離床センサーが鳴る回数だけ、患者さんに触れる機会でもあることから、互いの信頼関係を構築できるタイミングでもあると思っています。

転倒・転落対策が事故の減少に結び付くには時間がかかるかもしれませんが、「患者さんをみる」という取り組みをスタッフ全員で行えば、いつか結果が出ると信じて活動していきます。

テクノス通信 vol.116 （2019 年 3 月発行）より